

第1回 咲洲庁舎の長周期地震動対策に関する専門家ミーティング 概要

■専門家の出欠状況（五十音順・敬称略）

井上 一郎	京都大学 名誉教授 一般財団法人日本建築総合試験所 副理事長 試験研究センター長	出席
大川 出	国立研究開発法人建築研究所 客員研究員 株式会社東京ソイルリサーチ 取締役	出席
釜江 克宏	京都大学 原子炉実験所副所長 教授	欠席
川瀬 博	京都大学 防災研究所 教授	出席
吹田 啓一郎	京都大学 大学院工学研究科 教授	欠席
竹脇 出	京都大学 大学院工学研究科 教授	出席
多田 元英	大阪大学 大学院工学研究科 教授	出席
福和 伸夫	名古屋大学 減災連携研究センター長 教授	出席

■意見の要点

【対象とする地震の規模】

- 最大クラスの地震は必ずしも考えなくてはならない地震ではないので、本当に最大クラスの地震を対象とすべきなのかどうか。
- 内閣府は、最大クラスの地震動について、設計に使うべき地震動とは言っていないが、内閣府から情報が出ている以上は、どのようなものなのか、府としても見ておきたいということだろう。
- 最初から最大クラスだけに検討を絞るのではなく、過去地震を対象とした国土交通省の対策案についても検討してはどうか。

【地下構造モデル】

- 表面波が出ていれば、どちら側から波が来るかによって、大阪の盆地で周期が変動する。観測では、スペクトルの山が二つある記録もあるし、複数の記録についてスペクトル比を見た方がいいかと思う。一次だけでなく、二次、三次の周期についても注意深く見ていただきたい。
- 工学的基盤から柔らかい表層を通るときに、周期がどのように変動するか、見ておいていただきたい。
- 地震基盤の深さについては、産総研（国立研究開発法人産業技術総合研究所）のモデルがどうなっていたか、見ておいていただきたい。
- KiK-net（国立研究開発法人防災科学技術研究所の強震観測網）のPS 検層も見ておいてはどうか。

【地震動の作成】

- スペクトル特性については良くわからないところがあったり、また、建物側も周期の幅に変動があったりする。入力地震動は、あまりどこかの周期に敏感になるのではなく、スペクトル特性において、周期に幅を持たせる、包絡させるという考え方の方がいいのではないかと考える。

【スケジュール】

- 国土交通省が長周期地震動対策のパブコメを行っているので、それを踏まえた進め方も一応考慮しておいたほうが良い。